

平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

| | |
|---------|--------------------------------|
| 受賞対象授業名 | Post-Study Abroad Seminar |
| 曜日・講時 | 水曜日 3 講時開講 |
| 講義コード | 2714 |
| 授業区分 | 授業区分①：受講者数が 25 名以上～49 名以下の開講授業 |
| 担当者名 | ジョン・カンベルラーセン |
| 所属学部・学科 | 文学部英文学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

This class is designed for students returning from study abroad.

I decided to focus on two separate aspects; language and culture.

Many students feel that their language abilities start to decline after they have studied abroad. This is because, when they return although they may be taking English classes and using English for institutional purposes, they have little if any opportunity to use English in non-institutional ways. Part of their experience of studying abroad was using English in daily, social interactions, and developing their pragmatic skills. I decided that students should have time each and every lesson to use English for these social purposes. At the beginning of every class we had ‘student talk time’. In this period (usually 30 minutes long) students were free to talk to anyone they wanted to about any topic (or topics) in English. Students were reminded that this is a valuable exercise because they have to have the ability to initiate conversation, choose and negotiate topics and keep the conversation going. These skills are just as important as focusing on improving grammar and vocabulary skills and these were the skills that they developed and used when they lived abroad. The students seemed to really enjoy this opportunity to talk about things that were important to them, and often involved the teacher as a co-participant instead of a language ‘expert.’

Secondly, we devoted a lot of class time to discussions of culture. Students were encouraged to think about their experiences overseas and try to analyze them critically rather than superficially. Not only did students discuss their experiences overseas, but they also reflected on their return to Japan and their re-acquaintance with Japanese culture. This gave them the ability to take a critical and analytical stance towards their own culture and question some of their own assumptions and values. The purpose was not to promote one culture over another, but to foster a deeper understanding of the ways in which cultures differ (and converge) and develop the tools to discuss cultural issues in a mature and dispassionate manner, avoiding stereotypes and shallow anecdotes. The students discussed these issues in small groups facilitated by the teacher. The classroom atmosphere was lively and relaxed and students seemed to understand the purpose of this course.

このクラスは、海外留学から帰国した学生の為に設けました。

言語と文化という2つの側面に焦点を当てています。多くの学生は、海外で習得した言語能力は帰国後に衰え始めると感じています。

これは英語の授業を取っているにも関わらず、授業以外で英語を使用する機会が少ないからです。留学中は日常的な触れ合いの中で英語を使用し、実践的な会話力が上達します。私は、学生達はこのような社会的目的の為に英語を使う時間を全ての授業で持つべきだと決めました。全ての授業の始めに‘student talk time’を設けました。この時間は（通常30分程）学生達は誰とでもどんな話題でも自由に英語で話します。学生達は会話を続けていくのに、話題を選択したり交渉したりする能力を持たなければならないので、これは貴重な練習になると気づきます。これらのスキルは文法や語彙を向上させるスキルと同様に重要で、何よりも、学生たちが海外の生活で上達させ使用していたスキルです。学生達は自分にとって大切なことを話せるこのような機会を楽しんでいるように見え、しばしば教師も言語の‘専門家’ではなく、参加者として会話に関与しました。

第二に、授業で文化について話をする時間を多く取っています。海外での経験について、表面的ではなく批判的に考え、分析するように学生達を促しました。学生達は海外生活の経験を議論するだけでなく、日本に帰国して再び日本文化を見つめ直す機会となります。このことによって自分の文化に対して批判的で分析的な見方ができるようになり、自分の前提や価値観を問い直すこととなります。目的は、1つの文化だけを促進するのではなく、複数の文化の違い（と一致）を深く理解し、ステレオタイプや浅い逸話を避け、冷静かつ客観的に文化の問題を議論する為の方法を身につけることです。学生達は教師の手助けを得ながら、小グループで議論しました。教室の雰囲気は生き生きとリラックスしており、学生達はこのコースの目的を理解しているように見えました。

**平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

| | |
|---------|-----------------------------|
| 受賞対象授業名 | アパレル製作実習 |
| 曜日・講時 | 木曜日 4-5 講時開講 |
| 講義コード | 4106 |
| 授業区分 | 授業区分①：受講者数が25名以上～49名以下の開講授業 |
| 担当者名 | 青木 美保子 |
| 所属学部・学科 | 家政学部生活造形学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

この授業は基本的な形のスカートとブラウスの製作を行うという基礎的な実習ですが、すべての衣服製作の基礎となる技術を学びますし、課題にどう取り組むかという点においても、今後の製作関連の実習に大きく影響する授業です。ですから「最初が肝心」の姿勢で、以下のようなことに配慮しています。

◇基礎の大切さを理解する。

最初の授業で衣服製作関連授業の内容を記した一覧表を配布し、2回生、3回生とステップアップする授業があり、この授業が、自在に服作りができるようになるための基礎実習であることを理解させる。

◇少ない課題で、多くの縫製技法を学ぶ。

限られた時間数のなかで様々な縫製技法を学ぶために、各縫製工程を解説する折に、実際に自らが使う技法以外にもバリエーションがあることを、実物見本を示しながら解説する。

◇個人のレベルにあったバリエーション。

針の持ち方が分からない学生から、すでに衣服製作経験のある学生まで、個々のレベルに合わせ、ディテールのデザインや柄合わせ等で、課題のレベルを微調整する。

◇授業時間外のきめ細かな対応。

分からない時にいつでも質問できる体制をとっている（LSの協力が不可欠）。

◇失敗を楽しむ。

要尺が足りない、縫製途中で鍵裂き等、様々な失敗に対し、後悔や挫折感を味あわせないよう、デザイン変更や装飾の工夫を提案し、モチベーションを維持させる。

◇「ものづくりは大変だけど楽しい」を体験する。

最終授業では、錦華殿で、モデル気分の撮影会を行い、達成感、満足感を十分に味あわせる。

平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

| | |
|---------|--------------------------------|
| 受賞対象授業名 | 学校保健 |
| 曜日・講時 | 火曜日 2 講時開講 |
| 講義コード | 4341 |
| 授業区分 | 授業区分②：受講者数が 50 名以上～99 名以下の開講授業 |
| 担当者名 | 鹿間 久美子 |
| 所属学部・学科 | 家政学部生活福祉学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

本科目では、学校保健、学校安全及び食育についての基本を学びます。関連する学校教育法や旧学校保健法等の改正を受け、文部科学省通知の発出や学習指導要領の改訂も踏まえて、歴史や法令等にも触れます。従って養護教諭を目指す 2 回生にとって、必要性は理解しているものの、取り付き難い科目であることは否めません。

そこで、教科書は、教育実習及び教員採用試験専門科目の対策としても活用でき、さらに現場では養護教諭執務の拠り所となるような、「学校保健実務必携」を使用しています。本書は、1500 ページに及ぶ学校保健・安全に関する実務の解説書になっていますので、授業開始後 1 か月が経過するまでに、50 枚程度の項目見出しの貼付を架しています。授業では、スライドを使い資料を配布しますが、同時に教科書の早引きも行いますので、見出しの貼付には積極的な姿が見られます。

授業は、4 分割して、導入は学校保健や子供の健康に関するニュースや話題を紹介し、動機づけを行います。次に、前回提出された、本時の学び・講義への評価・質問・意見・教員へのコメントを記載するワークシートの中から注目する内容を紹介し、解説や補足を行います。展開では教科書の抜粋をスライド資料として配布し、重要なポイントをマークしていく作業を行います。その際、重要な内容については現場の養護教諭の活動状況がリアルに感じられるような、教員自身の経験やエピソードを付け加えながら解説を行うため、印象に残りやすいようです。また、保健教育の章においては、学生を生徒に見立てた模擬授業など参加型の手法を取り入れ、これまでの学校生活において自身が学校保健といかに身近にかかわってきたのか体験し、自分化が図れるように工夫しています。授業のまとめではワークシートを記載して本時を振り返ることで、次の授業につながるようにしています。

前述したように教科書は膨大な量であっても、多くの学生は、現在および将来に向けて重要な内容と捉えて、授業後の質問も多く寄せられています。また、授業時間外の予習復習に加え、関心を持ったテーマにおいては調べ学習にも積極的に取り組む様子が見られました。

また、3 回生科目の看護技術や精神保健などでも、学校保健に関する学びを想起・結合させながら、スパイラルに取り入れ、学校保健、学校安全及び食育の基本的な理解についての完成を目指しています。

**平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

| | |
|---------|--------------------------------|
| 受賞対象授業名 | 国語科教育方法論 |
| 曜日・講時 | 木曜日 5 講時開講 |
| 講義コード | 3190 |
| 授業区分 | 授業区分②：受講者数が 50 名以上～99 名以下の開講授業 |
| 担当者名 | 井上 一郎 |
| 所属学部・学科 | 発達教育学部教育学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

本講義は、国語科教育について、実際の教育現場に応じ、理論的にも、実践的にも対応できる能力を養成することを目的とする。現行学習指導要領における国語科の目標が、実生活に生きて働く能力、各教科等に働く能力、生涯学習に役立つ能力を求め、なおかつアクティブ・ラーニングに基づく学習指導要領改訂の方向を打ち出しているのを見据え、学生をアクティブ・ラーナーになれるように講義の工夫を行っている。

- 3領域1事項に分節された指導内容について理解を深めるとともに、それらを具体化する指導方法について、教材研究、学習指導案の作成、模擬授業の授業研究等を通じた実践力の習得について、講義と演習を交互に行うようにした。知識の習得と演習を繰り返すようにしている。
- 学校において行う司会グループを編成し、毎週交代しながら講義の最初に「前時の復習」と「今週の講義内容を「学習の目あて」（教員から事前または当日説明）として確認させた後、本時の学習方法と時間配分を教員から説明し、講義内容をメタ認知できるようにしている。
- 課題を出したときは、パーソナルワーク→グループワーク→クラスワークへと高次化しながら考えさせ、最終的に教師が複数解や最善解を示し、一般化や体系化を図るようにする。ワーキングの時間には、教室を机間指導したり、質問に回答するように心がけたりしている。
- まとまった知識は、テキストによって解説するが、実感するために教科書教材の実例を使用したり、ワークシート等を開発、配布したりして自己学習させるようにしている。
- 授業への出席は毎回必ず確認すること、遅刻や私語、居眠り等をしてはいけないこと等を講義最初に明確に説明し、講義中にそのような事例があった場合は注意するようにしている。ただし、楽しい感じもてるように解説等はユーモアをまじえて話すように心がけている。
- 学習指導案を書いて模擬授業を経験させ、そこから実際の現場とどのような相違があり、改善が必要かを解説している。
- テキスト理解とノートの整理や復習に時間を割くように指導したことも効果を上げていると考えられる。
- 教育学専攻の専門講義であることから、教師になるために何が必要かということができる限り実際に現場で起きている事例から再三再四説明するようにしている。

**平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

| | |
|---------|--------------------------------|
| 受賞対象授業名 | 基礎調理学 |
| 曜日・講時 | 火曜日 5 講時開講 |
| 講義コード | 3844 |
| 授業区分 | 授業区分②：受講者数が 50 名以上～99 名以下の開講授業 |
| 担当者名 | 米浪 直子 |
| 所属学部・学科 | 家政学部食物栄養学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

アクティブ・ラーニングという指導法に関心が寄せられています。アクティブ・ラーニングとは、①自主的・主体的な学びの展開、②協同的な学びの展開、③課題解決型の学びの展開を実践するものです。最近、小学校から大学までその取り組みが盛んに行われるようになってきました。本学でも研修会が行われ、それに参加したのをきっかけに、授業改善のために実施してみることにしました。今回の授業評価はその成果が出たものだと思っています。

本授業は、食物栄養学科の1回生を対象とした必須の専門科目です。専門用語やカタカナの成分名が多く、テキストを読んでいるだけでは分かりにくく退屈してしまいます。再履修者も多く、単位が取りにくい科目です。そのため、これまでにパワーポイントを使って写真を見せながら説明したり、課題をいろいろ出して予習復習をさせたり、ゲストスピーカーによる授業も行っており工夫してきましたが、あまり効果が上がりませんでした。

今回は、私が若いころに海外の大学で学んだ授業にヒントを得て、独自のアクティブ・ラーニングを実施してみました。その主なポイントは次のとおりでした。

- ① 最初に授業のコンセプト、勉強方法を説明する。
- ② 図式化したモデルを板書する。
- ③ 事例を挙げて説明する。
- ④ 学生同士で話し合いをさせる。
- ⑤ 学生の意見をきく。
- ⑥ 大事なキーワードを繰り返し説明する。
- ⑦ 学生に復唱させる。

学生と教員が同じ目線で話し合いのできる、実践的な学びができる授業を目指しました。

平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

| | |
|---------|--------------------------|
| 受賞対象授業名 | 教養科目 B (芸術と表現 3) |
| 曜日・講時 | 木曜日 2 講時開講 |
| 講義コード | 1955 |
| 授業区分 | 授業区分③：受講者数が 100 名以上の開講授業 |
| 担当者名 | 前崎 信也 |
| 所属学部・学科 | 家政学部生活造形学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

授業内容

芸術の授業を行い学生にアンケートをとると、まず間違いなく「私は美的センスがないのでわからない」という意見を目にします。しかし、芸術の専門家が芸術を評価する際に「美しさ」で作品の評価をすることは実はあまりありません。文化や芸術の評価には客観的な判断基準があり、その基準を知ることにより理解できるものになります。このような観点から本授業は「美しさ」以外の芸術の見方について学びます。毎回異なった視点で、様々な文化や芸術作品が評価されている仕組みを読み解いていく講義形式の授業です。全学部対象の授業ですので、専門分野に関わらず、受講した学生に「文化や芸術は難しくない」と意識し、教養を深めてもらうことができれば目的達成です。

取り組み・工夫

現代の文化・芸術を取り巻く国内外の最新の動向を中心に紹介しています。画像を多く使用したパワーポイントを使った授業です。学生を一時間半惹きつけることのできるよう、話し方、ストーリー展開、スライドの構成を工夫しています。同じ理由で、インターネット上の情報やビデオを利用するなど、多くのメディアを効率よく活用するようにしています。

平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

| | |
|---------|--------------------------|
| 受賞対象授業名 | 家族経済論 |
| 曜日・講時 | 木曜日 3 講時開講 |
| 講義コード | 4751 |
| 授業区分 | 授業区分③：受講者数が 100 名以上の開講授業 |
| 担当者名 | 坂爪 聡子 |
| 所属学部・学科 | 現代社会学部現代社会学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

本講義は、「結婚」「出生」「既婚女性の就業選択」の3テーマを取り上げ、その選択行動について理論的に解説し、高度経済成長期以降の「晩婚化・非婚化」「少子化」「既婚女性の就業選択の変化」の要因、さらに今後の対策や社会のあり方について経済学的に考えるという流れで進めています。

講義で意識していることは次の3点です。第1に、初回の講義で「経済学の基本的な考え方」について説明し、その考え方に従いすべてのテーマについて上記の流れで説明するということでパターン化することにより、理解しやすいように心がけています。第2に、理論の部分と、それに基づいた現実の説明のバランスに気をつけています。現実の説明にはデータを集めた配布資料や実証分析の結果、具体例を用いています。現実を理論と関連づけて説明することにより、理論の理解を深め、同時に現実を経済学的視点から見る面白さを感じられるように努めています。第3に、学生・社会の関心や現状の変化に対応して、講義で紹介するデータや実証分析など講義内容を見直しています。この見直しには、できる限り時間をかけるようにしています。

平成27年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

| | |
|---------|--------------------------|
| 受賞対象授業名 | 簿記 I |
| 曜日・講時 | 金曜日 1 講時開講 |
| 講義コード | 4652 |
| 授業区分 | 授業区分③：受講者数が 100 名以上の開講授業 |
| 担当者名 | 掛谷 純子 |
| 所属学部・学科 | 現代社会学部現代社会学科 |

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

簿記については、社会人で必要となるスキルであるという認識があると同時に、難しそうだというイメージもあるようです。そのため、最初のうちは会計特有の言葉をわかりやすい言葉に言い換えながら授業を進めています。また、取り扱う題材が「企業（個人商店）の取引」であるため、学生にとってはイメージしにくいと思われます。そこで、例えば「商品の仕入」を説明する際には、具体的にペットボトル飲料を見せながら、「飲料を販売している商店が、これを 1 本 50 円で 100 本仕入れてきたとしたら…」というように、具体的にイメージしながら内容を理解できるよう配慮しています。

簿記を理解するにあたっては、問題演習が重要となるため、日商簿記検定の受験を促すとともに、毎回宿題を課すなど、自主的に問題を解く時間を取ってもらうよう配慮しています。しかし、受講生が大人数のためフォローができていない部分があり、その点が今後の検討課題です。

今回、このような賞をいただきましたが、まだまだ足りない部分が多くあると感じております。学生の意見を幅広く聞くとともに、他の先生方からご指導いただきながら、引き続き授業の改善に努めていきたいと考えております。